

「活物窮理」の四文字が華岡青洲の標語である

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

紀伊藩の儒者仁井田好古(1770-1848)の手になる「華岡青洲墓誌銘」に「遂唱内外合一活物窮理説」とあることから、華岡青洲(1760-1835)が提唱したのは「内外合一活物窮理」の八文字と考えられてきた。仁井田がこの墓誌銘を撰したのは1836年であるから、以来180年以上もこの説が世間に浸透流布してきたことになる。

「内外合一」の意義を考えると、この語句は青洲の主張と少しく異なることから、青洲自身は目指すべき医療を「内外合一」を含まない「活物窮理」の四文字だけの標語として門人に示したに違いないと演者は考えてきた。青洲自身、往時から医学は分科していることを認識していたのであり、「内」と「外」の「兼学」の必要性を訴えたが、「内」と「外」の「合一」を唱えたのではなかったからである。

ところがこれまで発表された青洲に関する著書や日本医学史の著書では、いずれも青洲の医学は標語「内外合一活物窮理」の八文字によって代表されるとしており、この八文字があたかも青洲自身の言葉であるかの如く受け取られて現在に至っている。しかし青洲の揮毫した書に「窮理」、「活物窮理」、の語句が見出されるものの、「内外合一」の四文字のみを記した書、あるいは「内外合一」の四文字を含む書はない。他の青洲の書も「医惟在内外合一」ではなく「医惟在活物窮理」の七文字である。「惟(ただ)」という副詞によって、青洲の目標とする「医」は「活物窮理」の四文字に尽きるということが明確に示されている。「活物窮理」も「活物」と「窮理」から成り立っている。「活物」によって「窮理」の状態を達成すると、「活物」はすなわち「窮理」であるとも解釈される。標語が「内外合一」を含まないということは青洲の医学を考える上でも重要である。なお青洲の意味する「内」、「外」は第一義的には診療科としての「内科」、「外科」を意味するが、そのほかに内科や外科の知識や技術なども意味すると考えられる。

水戸の本間玄調(1804—1872)は青洲の高弟の一人で、呉もその著『華岡青洲先生及其外科』の中で高弟中の第一位に挙げ、門人中最も多くの頁を費やしてその伝を叙した。玄調は出藍の誉れが高く、青洲もなし得なかった大腿切断術を行ったことでも知られている。

玄調が1859年に上梓した『続瘍科秘録』の巻頭に師青洲から贈られた「活物窮理」の書を掲げている。末尾の「華震」の「華」は「華岡」、「震」は青洲の名である。「活物」の右上に関防印を押しているから「活物」の前に文字はなく、この書が「活物」で始まることを示している。したがってこの「活物窮理」は「内外合一」に続くものではなく、独立した四文字の熟語となっている。玄調の長男高佐はこの著の「序」の中で「右活物窮理は南紀華岡青洲翁の語。往年、翁、家大人の為に書する所なり。」と解説している。

玄調は1864年に『内科秘録』を出版した。青洲に心酔していた玄調は自序の冒頭を「吾所主張亦活物窮理」の句で書き出している。師青洲は「活物窮理」を主張したが、自分もまた師に倣って同じく「活物窮理」を主張するというのである。師青洲の標語が「活物窮理」であることを明確に示している。

以上によって青洲が主張したのは「活物窮理」の四文字であったことが明快に理解される。青洲在世中の門人、そして青洲から親しく「活物窮理」の書を贈られた本間玄調の言葉であるから千金の重みがある。青洲の標語は「活物窮理」の四文字であることの決定的証左である。